

# 神戸国際大学 毛丹青教授「日本語応用論」にて講義

2012(平成24)年6月11日(月) 3:00~4:30

## < 毛丹青あいさつ >

授業を始めます。今まで坂和先生の本を2、3回に分けて訳してもらいました。皆さんに時間通りに提出してもらい、作業としては残っていますが、せっかくですので先生から学生諸君にお話を頂戴したいとお願いしました。今日はこれだけの本を皆さんにプレゼントしてくれるとのことなので、どうぞ愛読してみてください。今日の話では中国語の映画、世界の映画について紹介してもらいます。皆さんは訳したり、授業中に質問したりしたと思いますが、今から1時間程度お話をして頂き、その後質疑応答という形で、質問があれば先生に直接お聞きください。せっかくですからこの時間を活用してください。授業は「日本語応用論」というものなので、まさしく今の通りになっています。それでは皆さん拍手で迎えてください。

## < 坂和講義 >

### 第1編 坂和からの講義(3:00~4:10)

#### < 第1部 坂和的映画論の特徴 >

##### 1 私と中国

皆さん、こんにちは。中国語をNHKのラジオ講座を中心に勉強して3年になります。中国語検定3級と4級に受かりました。それ以上にどこまで出来るかわかりませんが、一生懸命やろうと思っています。中国への旅行は10回以上になります。『取景中国：跟着电影去旅行(Shots of China)』の青い本は5冊しか持ってきていませんが、興味があれば送りますので読んでください。これは毛丹青老師のプロデュースで私の中国旅行記と、中国映画の評論をまとめたものです。上海のブックフェアで大きく取り上げられて、毛丹青老師が中国のCCTV(中国中央電視台)の1時間近くの番組で取り上げられた時に、私もほんの30秒だけ顔が出ることになりました。

##### 2 新中国と二人の監督

私は弁護士を満37年やっています。1949年1月生まれ。中華人民共和国が成立したのが1949年10月1日ですが、それと同じ年に生まれて1974年4月から弁護士をやっています。映画は昔から大好きでした。小学生の頃から好きだった。小学生の頃というのは、つまり1950年代後半です。皆さんは全然知らない話です。中国では1945年に、日中戦争が終わりその後、共産党と国民党の戦いが終わって、1949年に中華人民共和国ができた。その後いろいろ問題があって、文化大革命が1966年から1977まで約10年間続いた。非常に大きな混乱の時代でした。私は1967年に大学に入りましたが、この当時の中国は文化大革命で大変な時だったんです。後で言いますが、中国では1978年に

北京電影学院が再開しました。文化大革命の混乱が終わったところで、北京電影学院が再開された。その第1期生が入ってきた。これがチェン・カイコーやチャン・イーモウ、田壮壮です。1984年に卒業した彼らは、4年間の勉強を基に映画作りに入った。1番最初にチェン・カイコーの『黄色い大地』が1984～85年に世界で大ヒットした。中国でこんなにすごい映画をつくる人がいると世界中がビックリした。その後チャン・イーモウの『赤いコーリャン』。これが1987年に発表されて、これまたすごいことになった。チェン・カイコーとチャン・イーモウが世界的に有名になり、それから中国の映画が世界に発信されていった。まず、20歳代の皆さんがこういう時代のことを知っているのか知らないのか、私も知りたい。北京電影学院が再開されて、2人の監督が出てすばらしい中国映画を発表したということを知っている人は？手を挙げて。…知っているね。ではチャン・イーモウの映画を5本以上観たことある人は？…まあ、いいです。後でレジメに基づいて話します。そういう大きな流れがあります。

### 3 私の小・中学校時代

1949年に生まれた私は小学生の時、親に連れられてよく映画に行きました。チャンバラ映画。わかるかな？中国でいえば武侠映画。サムライ映画、日本刀の。今、中国では受験競争が非常に厳しい。中国は、日本以上の競争社会になっています。日本は今、競争がなくなって甘くなっていますが、私たちの頃は非常に競争が激しかった。大学に入る時も受験勉強をやらなくてはならなかった。私もある程度やりましたが、親から「勉強しろ」と言われるのが嫌で、中学時代は1人で映画館に行って映画を観る日がありました。その当時は、3本立てで55円という時代です。現実が面白くないので、逃げて1人映画の世界に浸っていた。だけど、映画から、スクリーンから学ぶものがいっぱいあった。戦争もあれば、恋愛もあれば、家族間の争いもある。いろんな人間が見える。それが勉強になった。中学・高校時代はそれなりに勉強をしましたが、映画館で学んだことの方が自分の身についたと思っています。

### 4 私の大学時代

大学時代。1967年に大学に入ったんですが、この当時、日本は大学紛争の時代です。授業もろくろくやらない。この当時、中国は文化大革命という大騒動が起きたが、世界的にみるとアメリカがベトナムで戦争をやっていた。なぜかという、ベトナムが共産化する(共産化主義の国になる)のを阻止するため。中国は共産主義国ですから北ベトナムを応援していた。北ベトナムが南ベトナムの方に下りてくるのを阻止する、という戦いにアメリカが介入していった。これは朝鮮でも同じです。1945年に日中戦争が終わった後、中国では国民党と共産党の争いが続いた。韓国も北と南に分かれて戦い、アメリカが南を応援した。北にずっと攻めていった時に、中国が北を応援して盛り返した。そして、38度線で半島を北と南に分断することになった。これが1945年から50年代初頭にかけて起こったことです。1967年に私が大学に入った時期は、ベトナム戦争反対という、非常に大きな反戦運動が学生たちの間で起こっていた。もう1つ。日米安保条約で日本をどこまで守るのかについて、国内で世論が分かれていた。そういう大きな時代状況のもとで、私は学生運動をやっていました。ここで言いたいことは、その後、司法試

験に受かって弁護士になったんですが、法律の勉強をするためには確かに基本書を読まなければダメ。刑法の条文をきちんと理解しなければダメだ。また、行政法とか労働法とかいっぱいある。それはそれで勉強しなければならないが、大事なのはそれを使うのは人間だということです。法律の条文が全部頭に入っている。人を殺したらどう、民法ではどう・・・それを知っているのはいいけれど、それだけ分かっているも、人間の気持ちが分かっていると弁護士として何の役にも立たないということです。ましてや、司法試験に受かったら弁護士か検事か裁判官か、基本的には何にでもなれるわけです。裁判官になった時に人の気持ちがわかる裁判官か、それとも機械的に条文を当てはめるだけの裁判官か、ここが大きな問題になるわけです。大学時代に学生運動をやっていた。法律の勉強をやるのは遅れていた。しかし学生運動の中で学んだものは大きかった。今の話をまとめると、小学校・中学校は勉強を適当にサボりながら映画から学んだ。大学時代は、法律の勉強そっちのけで学生運動をやる中で生き方を学んだ。それが今、生きています。これを今日のお話の前段として、皆さんに紹介したいと思います。

## 5 映画検定

レジメを見てください。今のような話を最初にまとめています。

ここで紹介したいのが、映画検定。最近は何でも検定ブームです。京都検定とか、歴史検定とか、最近では日本の昭和の時代を懐かしんで昭和検定もあります。映画検定とは、映画に関するいろんな知識を勉強しなさいということで、公式のテキストブックに基づいて問題が出ます。4級、3級、2級、1級があります。映画のことを知っているつもりでしたが、教科書を勉強しなければダメだとわかり、教科書を買って一生懸命覚えました。4級と3級が受かりました。4級はチョロイと思って次には2級も受けようと思ったが、これはとてつもなく難しい。1級になるとプロ級になってくる。そこまでやっても仕方ないと思ってやめましたが、4級と3級を受けたということで自分の勉強になったし、映画を観る時の見方が違ってきました。いろんな映画のテクニックや、この話はこういう意味だということが分かります。例えば、皆さん「ポストプロダクション」って分かるかな？日本語では「編集」。クローズアップは、写真を撮る時にアップして撮る撮影のテクニック。映画づくりのためには、脚本をつくり、脚本に基づいて俳優が演技をする。これは所詮つくりものです。こういう風に動きなさい、しゃべりなさいという形でやるわけです。これをとにかくフィルムを回してアホほど撮るわけです。脚本に基づいてシーン1、シーン2を撮って、撮影が終わった後で編集するのです。これが、ポストプロダクションです。例えばテレビでも、インタビューをしてくれることになった場合、カメラが入って30分くらい回してインタビューしてくれるのですが、実際テレビに映るのは5秒だけ。いっぱい撮った後でそれを、うまくつなぎ合わせていいものをつくる。映画もそれと同じ。回しているフィルムは何百時間とある。しかし、映画は基本的に2時間、長くても3時間でまとめる。ということで、いいものを残し、いらぬものは捨てる。ここに音楽を付ける。映画はこの「ポストプロダクション」によって良いものになったり、出来の悪いものになったりするわけです。映画検定の勉強をやることによってそれがよく分かる。知識を得ることによって、映画の見方がよ

り深くなるということです。面白かった、楽しかったというのもいいが、もっと深く突っ込んで観るためには知識があった方がいいということです。そこには映画作りのためのテクニックもあれば、歴史の知識もあります。例えば、中国の「敦煌」の物語とか、『三国志』の物語です。『三国志』は諸葛孔明がどうだったとかは誰でも知っているが、呉の孫権と誰が仲が良かった、悪かった、などになるとちゃんと勉強が必要です。それから中国には四字熟語が山ほどある。中国の皆さんは知っているけれども、日本人はほとんど知らない。そういうものを勉強し、歴史を学んでいくと、より面白いということです。『三国志』は知っていても、『項羽と劉邦の戦い』の中に出てくる虞美人の話になるとあまり知らないわけです。歴史と映画づくりの知識を学ぶことによって、より映画に対する理解が深まることがあります。

## 6 あなたのベスト1は？

レジメに戻ります。ここに、今まで観た映画の中で、何が良かったか、「あなたのベスト1は？」という質問と答えを書いています。おじさんたちの集まりの中でそういう質問をすると、「私は・・・」と挙げますが、同時に最近の映画は面白くない、くだらない映画ばかりやっているという話になる。「今の若い者は・・・」というのと基本的に同じで、自分の若かりし頃の感受性豊かでいろんなものを吸収できていた頃のことはよく覚えているんです。そこで、最近の映画は興味が湧かない、観ても面白くないと感ずるため、そういう発言になりがちです。そういうことを計算に入れたうえで、「私の1本」という話をすると、やっぱり時代時代を反映する。その人の好みを反映するということで、非常に面白い話し合いができることになります。

## 7 なぜ映画評論を？

昔から映画が好きだったことがあって、映画評論を始めたのは2001年からです。11年前です。昔から映画はよく観ていました。それを評論という形で書こうとしたのは2001年からです。きっかけは、事務所のホームページを始めたことです。そこに趣味のページをつくり、映画評論を入れた。こんなすばらしい映画があった、とその時は印象に残っていても、放っておくとすぐに忘れてしまう。それを文章に表現すれば面白いなと思って、書いて載せた。それをやり始めると、書くという作業は大変だけど面白いということで、はまりました。それまではお金を払って映画館で観ていましたが、増えてくると映画配給会社との接点ができる。また、新聞などに映画評論を書くようになった。そうなってくると、お金ももらえるし、名前も載せてもらえる。すると配給会社から、事前にやるマスコミ用先行試写会の案内をもらえる。それを観て、公開前に書く、ということになる。そうすると、年間50本だったのが、150本、200本になる。多いときは年間300本、一番多い時は年間330本観ていました。弁護士の仕事をやりながら、昼間試写室で約2時間映画を観る。終わったら、その評論を書く。書くのに同じく2時間くらいかかります。それだけの大変な作業をやってきたわけです。そうすると、弁護士が本業か映画評論家が本業かよく分からなくなってきました。そういう時に毛丹青と出会いました。「こいつ面白い奴やな。弁護士のくせに自転車に乗って映画ばかり行って」と、彼も思ったみたいです。私も毛先生がどこでどんなこと

をやっているのかを見て、すごいことをやっている人だな、と意気投合して現在に至っています。昔から映画が好きだったこと、大学では学生運動の中でいろんな経験をしたこと、弁護士になってからは映画を観る時間はほとんどなかったけれど、年末年始などに集中的にテレビで観た映画から学ぶ人間というものが役に立ったこと、2001年からは映画評論家としての仕事が半分くらいになっていること。これが私の自己紹介です。

## < 第2部 坂和的中国映画論 >

### 1 中国電影100年その1 朝日新聞

次に、レジメの2頁を見てください。ここが、皆さんに勉強して欲しい「中国電影100年」です。中国映画が100年なんです。資料1～3を見てください。朝日新聞の2006年の記事です。中国では1905年に初めて映画が作られました。それから100年ということです。それを、朝日新聞が特集しました。後でゆっくり見てください。資料2には「第5世代」としてチャン・イーモウとチェン・カイコーが紹介されています。このころ、『HERO(英雄)』と『LOVERS』でチャン・イーモウがハリウッドに進出していく時期でした。『紅いコーリャン』や『初恋のきた道』など心温まる映画をつくっていたが、だんだんハリウッドで大金を稼ぐためにはこんな映画作りをした方がいいだろうと、だいぶ変わっていった。そういうのがいいのか悪いのか、そういうことも含めて、朝日新聞が中国映画100年で特集しました。

### 2 中国電影100年その2 佐藤忠男

次に資料4を見てください。これは佐藤忠男という、映画評論家というより文学者の視点です。1930年代生まれなので、年は70いくつ。私より10歳以上年上の人です。まさに佐藤流の「中国映画100年」ということで、2006年にまず中国で本を出しました。この人はすごいです。日中戦争前の中国映画も観ている。1940年代の映画も観ている。それを全部書いている。本当に映画評論の第一人者。今でも第一線で活躍しています。資料4は、彼がまとめた『中国映画の100年』というの本の目次です。第2章 1930年代の諸作品。これは日本が中国に進出していつている時代です。第3章も日中戦争の終結まで。ここまでの映画は反日映画です。中国に旅行に行くと、テレビでは反日抗争をテーマにした映画やドラマをいつもやっています。私は中国でホテルに泊まっている時に時々観ますが、中国では日本が侵略してきたことに対して反日のために戦っているという姿が好んで映画に描かれたわけです。それが大きなテーマだったわけです。そういう日中戦争の時代の映画はこういうものだ、と紹介しています。第5章は、中華人民共和国が成立した初期の時代。『林商店』は有名な映画です。次の『炎の女、秋瑾』。これは中国の女性革命家の初期の人ですね。立ち上がったけど、殺された。それから文化大革命。その次、第8章では第5世代の監督について書いています。このように彼なりの中国映画をまとめたものを紹介しているわけです。ここでは香港映画と台湾映画も出ています。特に香港映画は、イギリスの影響を受けて次々

と新しいものを作り出した。中国映画は少し遅れました。香港ではジョン・ウーやアン・リーという有名な監督が先にハリウッドに行って大成功しました。俳優ではチョウ・ユンファですね。中国はその後、20、30年遅れてハリウッドに進出していく。今やすごい状況になっています。

### 3 中国人の好きな日本映画は？

資料8を見てください。次は『中国10億人の日本映画熱愛史』という新書の目次です。中国人の好きな日本映画。中国の10億人(今は12か13億人かわかりませんが)が大好きな日本映画についてです。みんなが知っているのは高倉健さんと中野良子さん。そして、山口百恵は知っているね。『赤い』シリーズというドラマをやっていた。中国10億人がそういう日本映画が大好きだということが書かれています。今の若い人は、日本のアニメが大好きですね。同じように1970年代、80年代にはこういう俳優や映画、ドラマを愛していました。チャン・イーモウには『単騎、千里を走る』という映画があります、これは高倉健を主演に迎えて作ったものです。こういう風に、中国映画を見ていく中で中国人は日本とどんな付き合いがあったのか、きちっと勉強し、自分で資料を集めて映画を観て感じていかなければ、なかなか分からないことです。

### 4 アジア映画というくり方

先ほど話した佐藤忠男さんはすごい人ですが、私もその1/10か1/100ぐらいは勉強しているのかなと思っています。資料9を見てください。もう1つデカイ話は佐藤忠男さんの『私はなぜアジアの映画を見つづけるのか』という本の目次です。『中国映画の100年』では中国と香港と台湾の映画を書いていたのですが、こちらはアジア映画ということで、フィリピンとかミャンマー、アフガニスタンとかの映画について書いています。彼のこの本を読むと感激します。マニラの映画祭に呼ばれて3、4日間行って何をしたのかというと、映画を30本、40本観た。要するに、朝から晩まで映画ばかり4本も5本も観ているわけです。集中して映画祭に出てくる作品を観てきて、フィリピンの映画はこうだと書いているわけです。最近、すごく元気なのはインドの映画。これはミュージカル仕立てが多くて、キレイな女優さんが出てきて最後はハッピーエンドというスタイルが決まっています。とにかく迫力があって面白い。アジア映画というくり方をするのも面白い捉え方ですが、これをするにはよっぽど勉強しなければなりません。ちなみに今、イランはえらいことになっていますね。イラクとアフガニスタンは、アメリカが世界の憲兵としてやっつけた。しかし今、イランが大変なことになっている。一昨年くらいからアフリカのエジプトで民主化を求める革命が起こり大変なことになりました。そういう中でもイランの映画はいっぱいある。イランは映画大国なんです。私も今年観た『別離』という映画に感動しました。このようにアジア映画からも学ぶものがいっぱいあると言えます。

### 5 中国電影100年その3 坂和流

レジメに戻って、中国電影100年について、レジメの3頁を見てください。先に話してしまいましたが、朝日新聞のまとめは資料1～3の通り。佐藤さんのまとめは資料4の通りです。そこで、レジメの2

頁に戻ってください。その前に、坂和流のまとめを書いています。朝日新聞がまとめたらこうなる、佐藤さんがまとめたらこうなる。しかし、坂和流でまとめたらこうなるということをそこに書いています。坂和流に中国映画をまとめるについて何が必要かという、やっぱり歴史の勉強が必要です。私は大学受験の時も中国史が好きだったんです。京都大学の法学部に入ろうと思っていましたが、京都大学は中国史のウエイトが大きい。だから、高校1年生の時に中国史を1年間勉強しました。そういう影響もあって、好きだったんです。『三国志』や四文字熟語も好きでしたし、中国の歴史が大好きだった。中国映画を観るについてはきちっと歴史を押さえておかなければならないと思います。そこで、『三国志』の時代や項羽と劉邦の時代はそれとして、1番大事なのは近代の100年ということです。清の時代が終わりに近づき、西欧列強が中国に進出していった。世界の帝国主義陣営が中国に入っていった。その流れの中で、日本も入っていきこうとした。そういう中国の近代史を見ると、中国映画の『阿片戦争』という映画は必見です。次に孫文の時代。孫文の時代でよくわかる映画は『宋家の三姉妹』。観ている人は？1人、2人。これはいけない。これを機会に観てください。『宋家の三姉妹』は古いけど、辛亥革命100周年ということで、近時は『1911』と『孫文の義士団』が作られました。これを観た人は？結構観ている。そういう時代背景がこれらの映画を観ればよくわかる。中国人の学生は自分の国のことだし、お父さんお母さんから聞いているから分かりますが、日本の20歳の若者はほとんど知らない。大阪では橋下大阪府知事が出てきて、昨年大阪市長になって、大阪維新の会というのをつくって、今政治が大きく変わろうとしている。こういうことについても、皆さん勉強してくださいね。そのキーワードは何かというと、日本の民主主義はいいんだけど、何も決められない。決められない民主主義はダメだ。自分は決める民主主義をやるんだということです。そこで独裁という言葉を使った。中国の「一党独裁」とは違う言葉ですが、独裁という言葉を使ってまで、決められない民主主義はダメだということを言っているわけです。日本は、1945年から今日まで戦後67年間ずっと平和だった。戦争が何もありません。中国はインドやパキスタンとの紛争があったり、いろいろやっていますね。それこそ文化大革命の時には餓死者まで出るなどいろいろあったわけです。ところが、日本はずっと平和。そして、このまま世界一の経済大国になるのかと思いきや、バブルがはじけてしまった。バブルの頃のお父さんお母さん、今アラフォーと言われている40代、50代の子供が今20代です。ところが彼らがダメ。お父さんお母さんはゆとり教育を受けている。詰め込んでやったらダメだということです。ゆとり教育そのものが悪いわけではないが、彼らはゆとり教育のおかげで全く勉強していない。今、皆さんは詰め込み詰め込みでやっていますよね。それがいいのかどうかは分かりません。日本はゆとり教育の中で子供が生まれて、その子供たちが今20代になっているけれども、彼らは全然勉強していない。大学に入っても、分数がわからないほどレベルが落ちています。そういう子供たちに対して橋下市長が今、何をやるようとしているのかというと、近代史を勉強させなアカンと言っているのです。ここ100年の時代の流れを勉強する中で、自分がどう生きていくかを考えないといけないということです。それと同じ意味で、中国映画100年を考えるについても、こういう時代の

流れを考えないといけないということです。

清の時代から孫文が出てきて日中戦争が始まった。中国は日本を追っ払ったけれど、その後国共内紛ということになった。新中国建国後には、文化大革命になった。レジメに書いてある通りです。その中で中国の最高指導者は、毛沢東、鄧小平、江沢民、胡錦濤と続き、多分今年の秋からは習近平になるだろう。そういう歴史的な流れがあります。中国映画を日本や世界に紹介したのは、『黄色い大地』『紅いコーリヤン』が出てきた時からです。台湾は昔は日本の植民地だったけれど、日本とは友好関係が続いている。そのため日本人にはわかりやすい。香港はもともと中国だったけれど、イギリスがずっと使っていた。そのため1997年に中国に戻され一国二制度でやっているけれど、当然イギリスの影響があります。同じ中国でも、大陸でつくる映画と香港がつくる映画と台湾がつくる映画とそれぞれ違いがある。その違いをいろいろ勉強しながら、中国映画100年を見ていかなければいけません。

#### 6 私の観た中国映画は約230本！

次に、資料5、6、7を見てください。資料5は皆さんに配っている本、『シネマルーム5』に収めた中国映画の目録です。資料6は『シネマ17』に収めたものをまとめたもの。資料7は『シネマ18』から『シネマ28』までをまとめたものです。合計約230本。230本の中国映画を自分なりに書いているわけです。書いたものを縦に横に整理していくと、見えてくるものが当然あるわけです。日本人で映画好きな人は多いけれども、中国映画を好きな人は少ない。好きって言う人でも230本も観ている人は少ない。しかも、私はそれをすべて書いている。そういう人はよっぽどの専門家でない限りいないと思います。それくらいの自負心を持ってやっています。

#### 7 レジメ第5 陳凱歌、張藝謀（第5世代監督）の果たした役割と『黄色い大地』（84年）と『赤いコーリヤン』（87年）の意義

レジメ3頁の第5以下は、こういう観点で中国映画を、というものをまとめています。レジメ3頁を見てください。第5はチェン・カイコーとチャン・イーモウ、第5世代の果たした役割について。これがすごいわけです。その中でも北京電影学院が果たした役割というのは非常に大きい。彼らがなぜ1980年代に力強い映画を作ることができたのか。そこには文化大革命で下放されたり苦しめられたり、苦しみながら考えてきて、彼らのエネルギーがそこで爆発したということがあります。その時にチェン・カイコー、チャン・イーモウ以外にどのような人がいたのか、それを第6で書いています。

#### 8 レジメ第6 陳凱歌、張藝謀以外の中国映画の監督たち

第5世代以前の監督としては、呉天明『古井戸』と謝晋『阿片戦争』などがあります。これを観たときは感動しました。また、第5世代はチェン・カイコー、チャン・イーモウの2人だけでなく、田壮壮がいます。『青い嵐』、これがすごい。観た人はいますか？これは文化大革命の時の悲劇ですね。田壮壮監督の両親は現実にひどい迫害を受けました。特に、お母さんが女優さんです。毛沢東の奥さんも女優さんですよ？毛沢東の奥さんからいじめられたとのこと。まさに政治の激闘の中で、それぞれが苦しみな

がら作品をつくってきた。田壮壮はこの『青い嵐』という作品で1つの実を結んでいるわけです。彼はチェン・カイコーやチャン・イーモウとは違う生き方をやっている。また、劉苗苗やフー・メイ。第5世代監督はチャン・カイコーとチャン・イーモウの2人だけではないですよ、ということです。また、中国で1番人気があるのはフォ・ジェンチイ、フォン・シャオガン。彼らの作品は、とにかく面白いです。フォ・ジェンチイは中国の山田洋次監督という言い方をしているんですが、知っている人？『フーテンの寅さん』をつくっている監督、知らない？今は最高年齢になってきた。ついこの間、100歳の新藤兼人監督が亡くなった。山田洋次監督は今77、78歳くらいかな？フォ・ジェンチイは、山田洋次監督と同じような心温まる良い映画を作ると言われています。そんな有名監督のいい映画がたくさんあります。また、チャン・ウエンの『鬼が来た！』これを観た人は？日本人として大ショックを受けたけれど、すごい映画を作っています。それから、北京電影学院卒の才女シュー・ジンレイを知っている？彼女が監督したのが『見知らぬ女からの手紙』。新しい才能がどんどん育っているわけです。そうすると、ついつい日本はどうかと比較してしまいます。日本には国立の映画学校というのがないから、きちんと勉強した人が少ない。だから、テレビタレントでちょっと人気が出たら映画をつくるという傾向があります。そこで、しょうもない映画ばかり作っている。韓国は韓国で、国の力で学校をつくって勉強させている。中国にも映画の大学がいっぱいある。そこできちんと訓練した人が育っているから、映画の出来を見比べると、日本の映画はテレビドラマのアホみたいなのがいっぱいあります。

## 9 レジメ第7 第6世代監督とその役割

次は、皆さんの世代に近付いてくる第6世代監督の紹介です。これにはジャ・ジャンクー『一瞬の夢(小武)』『四川のうた』などがある。こういう第6世代の人たちが新しいものを作ってきている。その中でもロウ・イエ『パープル・バタフライ』や『スプリング・フィーバー』、『スプリング〜』は男の同性愛の物語。気持ち悪かったけど。そういうものが出てくる。次にダイ・シージェ。これはフランスに行っていた人で、ちょっと純粹の中国とは違うおしゃれなものを作りますね。それからワン・ビン。『無言歌』を観た人？モンゴルの方に教育のために連れて行かれて、人が吐いたものを食べる。食べるものがなくて草を食べる、とかすごい映画でした。こういう作品を見ていると、中国では自由に映画を作れないという問題があります。政治に関するもの、セックスについてはダメだなどいろいろある。日本でもセックスについてなど規制はある程度ありますが、基本的には表現は自由です。中国ではそこらへんが無理。したがって、中国国内では作れないので、外国で作って世界でヒットしているが、中国では観れないという映画もあります。ルー・チュアンの『ココシリ』も中国では上映が難しい映画です。第5世代の2人だけでなく、第6世代もどんどん育っています。時間がないので省略します。

## 10 レジメ第8 香港映画の果たした役割・第9 台湾映画の果たした役割

次に、香港映画が果たした役割。『レッド・クリフ』は大ヒットしました。これはジョン・ウー監督が先にハリウッドに渡って大成功し、その力を利用して新しい映画を作った形です。台湾映画も次々と新し

いものを作っています。

### < 第3部 坂和的中国映画論（各論） >

#### 1 レジメ第2 中国映画のジャンル分け

最後に、第3部 坂和的中国映画論（各論）の第2 中国映画のジャンル分けを見て下さい。ここでは中国映画のジャンル分けをいろいろやってみたいというわけです。そのジャンル分けの中でこの映画、あの映画と振り返っていったらいろいろ見えるものがあると思います。

#### 2 レジメ第3 中国映画を法律的論点で分けたら（弁護士の視点）・第4 この映画、あの映画をどう観るか？（坂和的検討の視点）

レジメの最後、6頁を見てください。これが、私なりの中国映画を観る論点です。歴史的な点も大事ですが、問題点を自分なりに考えながら観ることが大事です。たとえば、文化大革命とはなんぞや、あるいは土地のバブル。私は弁護士として都市問題を専門的にやっています。そういう観点で見ると中国でも『四川のうた』もそういう問題だし、立退き問題などもあります。それから最近でいえば、裁判官の問題もあれば、臓器移植の問題もあります。そういういろんな問題をテーマごとに考えてもらいたい。このレジメの中では、そういうことを書いています。

#### 3 レジメ第5 『名作映画から学ぶ「生きるヒント」がいっぱい！』

最後に、この『名作映画から学ぶ「生きるヒント」がいっぱい！』という本は、2010年の12月に出版されて、1年半経ちました。昨年春、毛先生と相談して、この本を中国で発表しようということになりました。この本の中にも中国映画が10本入っているし、ハリウッドの映画も中国でいっぱい上映しているわけですから、「映画から学ぶ『生きるヒント』」というのは、共通するテーマだろうと思ってやったわけです。しかし、ちょっと字数が少ないということで、今回皆さんに新たに翻訳してもらいました。それがレジメの最後に載せている20本です。これは最近の映画で、面白い映画ばかりです。中国映画が13本、それ以外に最近の戦争映画から何を学ぶかということで、私が特に入れたい戦争映画7本を入れました。『戦火の馬』はスピルバーグ監督が第1次世界大戦を舞台に描いた映画ですが、毛先生も私の薦めで観られて涙をポロポロ流したようです。『一枚のハガキ』は先日亡くなった日本の新藤兼人監督の作品です。『キャタピラー』は、日本が中国に進出した時の映画で、軍神の悲哀を描いています。大陸で手柄を立てようと思ったら、大砲の弾が飛んできて両手両足がなくなった。その中で軍神サマとなり、両手両足がなくなったけれども男としてセックスの欲だけある。そこで奥さんに迫っていくという、ちょっと気色の悪い映画ですが、その中で浮かび上がるばかげた姿を描き出した問題作です。そういう戦争映画7本と中国映画13本を追加しました。皆さんに翻訳してもらっているので、皆さんが翻訳するなかで感じたことを、後でディスカッションしたいと思います。

以上、「中国映画100年」というテーマで大きく勉強しました。その中で、今回この本を出版することをプラスしてやりました。皆さんも興味を持って取り組んでもらえたらと思います。今年の8月に出版

できる頃には、何人かは上海でまたお目にかかると思います。本日は、ありがとうございました。

## 第2編 学生からの質問とその回答（10分程度）

### < 毛丹青あいさつ >

皆さんに訳してもらったのは、この『名作映画には「生きるヒント」がいっぱい』です。8月に上海ブックフェアでデビューしようと考えています。先生は弁護士でありながら、中国映画には大変興味があります。非常に珍しいです。日本にはたぶんいません。大変立派な方です、ということをお伝えおきたい。先生は弁護士ですから、日々いろんな事件を扱っている一方で中国の映画を観ていくということを私の方からお示ししたい。少し時間がありますので2部に移ります。皆さんは翻訳をしているわけですから、先生に直接お聞き下さい。どうぞ自由に。映画でも映画でなくてもいいです。

### < 質疑 >

#### 1. 男子学生1：『羅生門』の映画をどう思いますか？

坂和)

『羅生門』は日本最高の黒沢明監督の昔の映画です。日本が世界に認められた最初の映画です。どう思うかと聞かれると、すばらしい映画だということです。黒沢明監督の映画は時代モノもあれば現代モノもある。それぞれ味わいがありますが、ああいう映画は中国人（外国人）にはわかりにくい映画だと思う。日本的な情緒があって異文化の香りがするという点で惹かれるのではないかと思います。

#### 2. 男子学生2：日本の法律と中国の法律をどう思いますか？

坂和)

時間1時間くらいいい？（笑）基本的に中国の法律は日本の法律をまねて作っています。そして、日本の法律はヨーロッパの法律をまねて作っている。法律には大きく、民事の法律と刑事の法律がある。民事の法律というのは民法、商法。これはどんな取引をやるかということだから、民主主義国家の個人というものを前提にして財産をどうするかというのを決めている。日本もヨーロッパの法律を取り入れて民事法が出来ました。刑事の方は処罰するんだから、国によってかなり違うんです。中国では刑事の方は犯罪の種類も多いし死刑もいっぱいあるし、だいぶ違います。だから、刑事の方は日本のマネをする必要は全くなく、独自にやっている。だけど民事関係は、日本のものをそのままたくさん取り入れています。基本的には。裁判所の制度とかが違うから中国特有のものはあるけど、民事に関する法律は日本とそんなに変わらないと思ってもらいたい。

特に私がこの分野で中国に進出したいなと思っているのは、日本で70年代にあった公害問題の法律で

す。大気汚染や水質汚濁など。今の中国はそれを40年後追いでやっているわけです。大阪万博の40年後の2010年、上海万博があって、大阪万博の7000万の入場者数を上海万博では絶対超すんだと頑張っていました。公害も同じように、日本が70年に大騒動して法律を作りました。中国は今もっとやらなければいけないけれど、あまりやっていない。日本で公害のためにどんな法律を作ったのか。私は弁護士として、そういう方面を一生懸命やっていたから、真面目に弁護士としてそれを中国に教えたい。映画は映画でこういう形でやりたいというのがあるけど、法律の分野ではそういうことをやりたいと思っています。取引関係の話は誰でもできるけど、公害関係をしゃべれる人はそんなにいないので、日本の経験をいろいろ教えたいなと思っています。今中国では、食品の廃液で天ぷらを揚げるとか、すごい問題が起こっています。

毛先生)

それではそろそろ時間なので、あまり活発ではなかったみたいですが、今日はこれぐらいにしておきましょう。先生には『名作映画から学ぶ「生きるヒント」がいっぱい!』にサインしてもらいましょう。また別の機会もありますから、中国の映画を好きになってください。拍手で先生に「ありがとう」と言ってください。

以上